しゅごキャラ！二次創作

何度でも上書きしてやる！

はなび

イクあむでイクトが記憶喪失

「……つーか、さむっ」
　身を縮めて、亜夢はブルブルと震えた。
「なんでこの時期に、海なのよ」
　きっ、と幾斗を睨めば、幾斗は優しく微笑んで亜夢を見つめていた。
「いいもんだぜ、冬の海も？」
「……」
　寒いのは苦手なくせに、と思うが、黄昏れた空を眺める幾斗が、悔しいけれど格好よくて。それ以上、亜夢はなにも言えなくなってしまった。
「……それに」
　亜夢の背中に回り、幾斗はそっと包み込むように亜夢をコートの中に入れた。
「こうしてると、温かいし」
「……」
　また湯たんぽ代わりか、と少しだけため息が漏れる。でも幾斗とくっついているのは、やっぱり温かい。本人には決して言えないけれど、嬉しいという気持ちもある。
　なにも言わずに、亜夢は幾斗に身を委ねていた。
「……ねぇ」
「ん？」
　亜夢が口を開けば、耳元で幾斗の声がした。
「今日、どうしてここに来ようと思ったの？」
「……」
「なにか、理由があったんじゃないの？」
「……」
　なにも言わずに、幾斗はただ亜夢を抱き寄せる手に力を込めた。
「イクト？」
　身を捩り、亜夢は幾斗を向く。
「別になにも。ただ、あむとデートしたかっただけ」
「……ホントに？」
「信用できない？」
「……」
　亜夢は、じっと幾斗を見つめる。ふ、と口元に笑みを浮かべて、幾斗はそっと亜夢の手を取った。
「少し、歩くか？」
　言って、２人は海岸沿いの遊歩道を歩く。繋いだ手は温かいのに。どうしてか、ひどく幾斗が遠くに感じる。
「……もぅ！」

　ばっ、と幾斗の手を振り払い、亜夢は声を張り上げる。
「言いたいことがあれば、言えばいいじゃんっ。そういうふうに黙ってるの、ズルいよ!!」
「……あむ？」
　驚く幾斗を尻目に、亜夢は駆け出した。後方から、幾斗の亜夢を呼ぶ声がする。でも、振り返りたくなくて。
　亜夢は、そのまま走り続けた。
「!?」
　がく、と身体が下に落ちた気がした――瞬間。亜夢の身体は、遊歩道に叩きつけられた。
　それなのに、ばしゃん、となにかが海に落ちた音が響く。
「……え？」
　振り返るが、幾斗の姿はどこにもなく。
「え……!?」
　波の音が、亜夢の耳に虚しく響いて。遊歩道に叩きつけられる寸前に、腕を捕まれたことを思い出した。
　あの、亜夢を引っ張った強い力の持ち主は。
「イクト――っ!!」
　亜夢の悲痛な叫び声も、目の前の漠然とした海に吸収されてしまうだけだった。

◇　◇　◇

　ぴ、ぴ、と機械音が響く病室のベッドに、幾斗が寝そべっている。点滴を伝う管が、幾斗の腕に繋がっている。痛々しく頭に包帯を巻いた幾斗を、亜夢は虚ろな目で見つめていた。
　幸い、命に別状はなかったものの、遊歩道から落下した際、身体中を岩にぶつけていたらしく。亜夢が呼んだ救急隊員に助けられた幾斗の身体は、すり傷だらけだった。
「……イクト」
　そっと名前を呼んで手を握っても、返事はない。亜夢の手を、握り返すこともない。
「イクト」
　少しだけ、声の大きさを上げる。それでも、幾斗はなにも言わなかった。
「い、くと……ぉ」
　ベッドの傍らに崩れ落ちるように、亜夢は膝をついた。まったく力の入らない幾斗の手を、握り締める。
　そのとき、バタバタと足音が近づいてきて、幾斗の病室の前で止まった。そうして、声と共にドアが開かれる。
「イクト！」

　入ってきたのは、今にも泣き出しそうな歌唄だった。
「ぅ、た……っ」
　縋るように、亜夢は歌唄に飛びつく。その亜夢の肩を支え、歌唄はベッドに横たわる幾斗を見据えた。
「あた、あたし、が……、あたしが、いけないの……っ。イクトは、あたしを……、助けようとして……」
　しゃくり上げながら、亜夢は言葉を並べる。だが幾斗を見つめて放心する今の歌唄に、到底亜夢の言葉は届かない。
　昏睡状態の幾斗が目を覚ましたのは、それから３日後のことだった。

「――…あむ？」
　幾斗の、亜夢を見つめる目が。まるで、拒絶しているみたいに冷たくて。
「……悪い、出てって」
　はー、と身体中から息を吐き出して。面倒臭そうに言われた亜夢は、おぼつかない足取りで病室を出た。
　どん、と扉が閉まると同時、足が、震えて。立っていることさえままならなくなった亜夢の肩を、空海が支えてくれた。
「しっかりしろよ、日奈森」
「……くぅ、かい」
　ふぅ、と重苦しいため息を吐いて、空海は廊下のソファに亜夢を座らせる。震える亜夢の目から、涙が零れた。
「ここ１、２年の記憶が飛んでるみたいでな。俺のことも、まったく知らなかったよ」
　歌唄や、唯世のことは覚えているのに。亜夢と出会う直前からの記憶が、なくなっていて。
　亜夢に、優しく微笑みかけてくれていた幾斗は、もうどこにもいない。

「……」
　身体を起こしてベッドから窓の外を眺める幾斗に、亜夢は声をかけるのを躊躇った。見惚れたように入り口に佇んで、口も開かずにそうしていると、やがて亜夢に気づいた幾斗が笑顔を見せた。
「また、来たんだ？」
　言葉に、ずき、と心が痛むのがわかった。
「あ、当たり前でしょ？　イクトがケガしたのは、あたしのせいなんだから」
　無理に強がって、亜夢は部屋の花瓶に手をかける。
「別に、いいのに。どうせ、俺は覚えてないんだから」

「あんたが、よくても。あたしは、よくない……から」
　花束を握る亜夢の手に、力が入った。視界が揺れてくるのがわかり、亜夢は花瓶を持ってそそくさと病室をあとにする。
　花瓶に活けられていた花を捨てて、水道の蛇口を捻る。蛇口から溢れる水と共に、亜夢の目からも涙が滴り落ちた。
「……っ、泣くな、あむ……!!」
　嗚咽を洩らしながら、亜夢はその場に座り込む。活を入れるように、ぱん、と頬を叩いて。
　あれから、何度泣いただろう。何度、自虐的な言葉を吐いただろう。
　そうしていても、幾斗の記憶が戻るわけではないのに。
「……水、もったいない」
　きゅ、と水道の蛇口が閉められて、亜夢ははっとして顔を上げた。
「い、くと……」
「そうやって、いつも泣いてたわけ？」
　悟られたように言われ、亜夢は下を向いた。
「気づいてたさ」
　花を活けて、幾斗は花瓶を手に取る。
「おまえ、いつも目を腫らして見舞いに来てたから」
「……」
「もう、来なくていい。おまえを見てると、気が滅入る」
　ぴしゃり、と言い切られて。泣きたくなるのと同時、沸々と怒りが込み上げてきた。
「……待って」
　地を這うような亜夢の声に、幾斗は振り返る。
「見舞いに来てあげてんのに 気が滅入るって、どういうことよ!?　普通は、ありがとう、とか、そういう……」
「その意気だ」
「……へ？」
　思いがけず一笑した幾斗に、亜夢は目を丸くした。
「見舞いに来るんなら、もっと気合い入れとけ。自分のせいだって落ち込んだ表情で来られたら、治るもんも治らなくなるから」
「……」
　不覚。亜夢は、俯いた顔を上げられなくなってしまった。
　あの、幾斗の優しい表情。あれに、亜夢はいつだって守られてきたのに。その笑顔を、見れなくなってしまって。落ち込んで沈んでいた亜夢を、幾斗は気づいていた。そうしてまた、立ち上がらせてくれたのだ。

　きゅ、と唇を噛んで、亜夢は顔を上げた。今までの思い出がなくなったのは、幾斗だけで。亜夢は、ちゃんと覚えているから。だったらまた、一から始めればいいのかもしれない。真っ白になってしまった幾斗の記憶に、新しい亜夢との思い出を書き込んでしまえばいいのだ。

◇　◇　◇

「いーくとっ♪」
「よぉ」
　笑顔で姿を現した亜夢に、幾斗は笑顔を見せる。
「今日、退院でしょ？　荷物、持ってあげようと思って」
「へーき」
「遠慮しないでいいから」
　幾斗の手の中から、亜夢は無理にバッグを取る。
「しばらくは、自宅療養でしょ？　また、お見舞いに行くね」
「いいって。学校とかあんだろ？」
「あたしが行きたいの」
　自分でも、ビックリするほど。ここ最近の亜夢は、かわいい女の子に徹していたと思う。好きな人の前で、かわいくありたい、と。常々からの願いが、幾斗が記憶を失くしたことで、たがが緩んだかのように。強気な亜夢を知らない今の幾斗の前でなら、素直になれる自分がいた。
　くす、と微笑んで、幾斗は亜夢を抱き竦める。一瞬の出来事に、亜夢は唖然としてしまった。
「ち、ちょっと、なに……!?」
「なんか、かわいいなーと思って」
「……は!?　か、かわいいとか、ありえないしっ」
　くっくっ、と声を殺して、幾斗は笑う。
「ひさびさ聞いたな、あむの強気の台詞」
「……え？」
「どんなあむも大好きだけど、最近のあむは、特別かわいかった」
「え……!?」
　ばっ、と顔を上げれば、唇に幾斗の温もりを感じた。
「ただいま」
「――…」
　幾斗の言葉に、自ずと涙が零れて。幾斗の笑顔が、歪んで見えた。

「今朝、目が覚めたとき。一気に、忘れてた記憶が押し寄せてきた。記憶がなかったときのことも、ちゃんと憶えてる」
　頬を伝う亜夢の涙を指で拭うと、幾斗はそこに唇を落とした。
「たまには、記憶を失くすのもいいかもな。かわいいあむが見れるし？」
「ば、バカじゃん!?」
　顔を真っ赤に染め上げた亜夢は、なおさらかわいくて。それまでの亜夢の新たな一面を見られたことに、幾斗は至福のときを感じていた。

何度でも上書きしてやる！■END

しゅごキャラ！二次創作

何度でも上書きしてやる！

はなび

E-Mail　hanabi7220@gmail.com
URL　https://lycka.cocotte.jp/871/
Twitter　@hanabi7220

■本書は非公式ファンブックです。原作者さま、出版社さまとは一切関係ございません。
■本書を無断で複写、転載、転売、オークションで出品等をするのはご遠慮ください。

おうちでつくる同人誌
https://cweb.canon.jp/pixus/special/room/doujin/